1970～94年の芥川賞受賞作品群にみる自然景観イメージとその変遷

IMAGES OF LANDSCAPES AND THEIR TRANSITIONS
IN AKUTAGAWA PRIZE WORKS FROM 1970 TO 1994

池田 朋子*, 大貝 彰**

Tomoko IKEDA and Akira OHGAI

A novel expresses a world as a model with concrete and universal descriptions, which includes expressions of landscapes. In this study, we analyze fifty-five novels which won Akutagawa Literary Prize from 1970 to 1994, to understand images of landscapes in recent years. Landscapes in the text are categorized into nine items and understood with stages of stories and periods. First, they are grasped quantitatively by the level of words. Then, reading stories around the words lead us to understand the meaning of items of the landscapes. As the results, after high economical growth, landscapes and their meanings decrease such as mountains as boundaries, rivers with plays, hills for understanding oneself relatively in the town and fields viewed on one's ways. Landscapes such as flowers, woods and skies which have been still left become to get more meanings.

Keywords: novel, image of landscape, literary prize, life in the present day

小説、自然景観イメージ、文学賞、現代生活

1. はじめに

(1) 背景と目的 人はカメラのように視野にある物の全てを見ているわけではなく、感情や無意識の淘汰によって選択された物を見ている。その中で何らかの印象に残ったものが景観のイメージとして記憶に残り、その蓄積が人にとって重要な心象風景になると考えられる。近年多くの景観研究がなされてきたが、景観を構成する各要素が人の心の中でどのような意味を帯びているかは十分に明らかにされていない。このことが景観計画・設計における方向性や合意形成といったソフトな技術面の遅れをもたらしていると思われる。本研究は、経年的に日本を代表するような小説を対象に、そこに書かれた景観を分析することで、社会的に共有された自然景観イメージを年代変化と共に明らかにすることを目的としている。具体的には、社会的に影響が強いと考えられる芥川賞受賞小説群をテキストとして、自然景観に関する表現の出現傾向を舞台や年代と関連させながら定量的に把握し、自然景観の各要素の特徴とそれに付随する意味、またその変遷を捉える。

描写された景観を分析した代表的な既往研究には、浮世絵やヨーロッパの風景画を対象として伝統的な美観の構成原理を解明したもの¹⁾、校歌を対象として地域景観の構造を解明したもの²⁾などがある。前者は、抽出された景観要素から「絵になる景観」の構成原理の解明を試みている。しかしテキストの持つ性質から、それに付随する

イメージまでは解読できない。一方後者は景観要素の組み合わせから地域景観構造を分析しているが、校歌の内容から各要素に託された意味やその要素により構成される場面の分析まではなされていない。心象風景としての景観イメージを把握するには、その景観要素の書かれた場面やそれに託された意味を解釈する必要がある。また、戦後の経済発展期を通じて町の構造やそこでの生活等が大きく変化してきたことを考えると、景観計画段階の基礎知識の一部として、現在につながる現代の生活に関わる景観イメージに関しても知見を得る必要があると考える。このような意味での景観イメージは大きく都市景観イメージと自然景観イメージに分けられるが、ここでは日本では景観の中でも特に自然景観が卓越していると考えられる^{注1)}ため、自然景観のみに着目した。

一方、描写された景観イメージの変遷を扱った研究には、海の歌謡曲³⁾、浮世絵⁴⁾に表現されたイメージの型の変化を分析したものがある。これらは類型やその構成の変化を主に分析していて、自然景観に託された意味の変化を直接具体的に分析したものではない。

このような背景から、本研究は小説を分析対象として近年の自然景観イメージとその変遷の解明を試みる。

(2) 小説への着目 さて、ここでは小説を景観イメージ分析の対象とする意味について述べる。小説は現実をモデル化して表す芸術の一形式である⁵⁾。人間はその歴史の始めから物語ることによって世界

* 豊橋技術科学大学建設工学系 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture and Civil Eng., Toyohashi Univ. of Technology, M. Eng.

** 豊橋技術科学大学建設工学系 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Civil Eng., Toyohashi Univ. of Technology, Dr. Eng.

を捉えてきた⁵⁶⁾。書かれ読まれるエクリチュールとしての小説は近代に成立したと考えられ、複雑な現状の人間や人間体験を認識し表現することに長けた形式である^{57,58)}。小説では、読み手を作品の内部世界へ引き込みその存在感を感じさせるしくみとして、作品の舞台が設定され、描写される⁹⁾。これは生の相似物としてつくられるが、類似は完全な再現ではなく、メタフォア、メニトミー、コントラストの作用によって全体と同一視された特殊なものだけが再現される¹⁰⁾。小説ではこの全ての作業は言葉によって成され、言葉は心象を直接生成し、そのまま表す力を持っている¹¹⁾。このように、小説ではテーマに対応して書くべきことが選択され、現実がことばによって構造化され、モデル化されていると言える⁵⁾。これは人間とそれを取り巻く環境の構造を作品独自の視点で一つのケースとして明らかにしたものと考えられる。それは個別で特殊な具体的な物事の表現であり¹²⁾ 作品の中のことばや文章はその書き手の態度を根底にひそめていて¹³⁾、作られたモデルは現実の現象のモデルであると同時に作者の人格のモデルでもある⁵⁾。しかし、一方これは他者への伝達を前提として作られ、多くの読者に体験され共有されて、普遍的で代表的な体験の一つのケースとして社会的に存在するようになると考えられる。このように小説は、つきつめれば「いかに生きるか」というテーマがそれぞれの個別なケースとして具体的に展開する特定の舞台において、人間とそれを取り巻く環境を描いた普遍性のあるテキストと考えられる。従って小説中に表現された景観を分析することで、ある時点で総合的に組み立てられている景観イメージの要素間の相対的な関係や、個々の景観に付随する意味や価値が、具体的で同時に普遍的な現象として明らかにされると考えられる。

2. 方法

2.1 テキストの選定

芥川龍之介賞受賞作品群は、多くの読者に共有され、また文壇の権威からも支持され、各時代を代表する純文学の小説である。

純文学というジャンルで小説は、「どうしても書かずにはいられない」という欲求の中で自発的に書かれる。従って娯楽の要素などに表現を影響されず、純粋に既存の環境の中での人間体験をつきつめて書いていると考えられる。ここで芥川賞は、60年以上の歴史を持つ、新人の純文学短編小説に与えられる賞である。日本で最も権威があり社会的影響力の大きい伝統ある賞と考えられる¹⁴⁾。従って受賞作は時代を代表し、レベルやスタイル、評価などの条件の揃った作品群と考えられ、分析対象としてふさわしい^{15,16)}。

ここでは現在に近い時代に分析の主眼を置くため1970-94の24年間に芥川賞を受賞した55作品をテキストとする。芥川賞は年2回選考発表があるが、ダブル受賞や該当作なしの時もあり、1年間に4-0作品の受賞作がある。小説が成立した時期と小説の舞台となった時代は必ずしも一致しないので書かれた時代は戦前から現代にわたる。

2.2 分析手法

ここでは、小説を分析対象とした既往研究の手法を簡単にまとめ、本研究の分析手法の概略を述べる。

(1) 既往研究とその手法 小説から景観イメージを分析したものではないが、随筆から風景¹⁵⁾を、小説から建築体験^{16,17)}を分析した研究がある。これらは定性的な手法で書かれた内容を深く読み込んでいく。また、建築空間情緒¹⁸⁾を分析した若山らの研究では、小説等に出現した単語が定量的に把握され、客観的な結果を出している。

一方拙稿¹⁹⁾でこれらの既往研究をふまえて小説から景観イメージを定量的に分析する方法論を提案し、2つのケーススタディに適用した。具体的には、まず景観に関する語の出現頻度を把握し、続いてこの結果をより深く解釈するため、文脈に戻って定性的な読み込みを行った。そして作品群で共通する語や意味内容を定量的に重ね合わせることで、できるだけ客観的に普遍性の強い景観要素や構成を抽出できることを示した。また著者の属性に関わらず共通する景観の要素や構成が多くみられることも示した。つまり、小説は著者の個人的な経験を越えて普遍的な景観をモデル的に表現していると考えられる。

(2) 本研究の手法 これらを受けて本研究では、作品群の中から定量的に共通する記述を取り出して景観の特徴を捉える。ここでは、1.(2)の小説の表現の特徴に関する考察と、拙稿¹⁹⁾の結果より、芥川賞を受賞した作品は全て等価なものとして扱う¹²⁾。

分析は詞句レベルと文脈レベルの二段階で行う。詞句レベルの分析では、どのような景観が多く書かれていたか、またそれがどのように変化しているかといった出現傾向を把握する。次の文脈レベルの分析では、その具体的な意味内容や質的な変化を把握する。

ここで、分析の単位について述べ、二段階の分析方法を説明する。小説はリニアに連続したテキスト形式を持つ。従ってその内容を定量的に扱うには、それを意味上のまとまりに切り分ける必要がある。小説に書かれた景観は、「舞台」となる場所、その中での1シーンとなる「場面」、そこでの「視対象」(リニアに述べられていくその時々物事)のシークエンスという意味の枠組みで捉えることができる。これを小説内の記述に対応させると、視対象は名詞を中心とした「詞句」のレベルに対応し、これが連続して文章の塊あるいは節のレベルにあたる「場面」が作られる。これは入れ子状により大きい場面や舞台に含まれていく。そこでまず、どのような自然景観の要素が書かれているかを単純に把握するために、最も小さい意味単位である詞句レベルで景観の記述の有無をみる。景観は舞台を説明するために表現されていると考えられるので、これを舞台ごとに集計する。これが詞句レベルの分析である。

次に各々の景観要素の具体的な内容とそれに託された心象を明らかにするため、文脈を読み込む。各々のことばは作品内で独自の意味づけを持たせられていて、その意味や重さはテキストを構成することばの関係の中で相対的に決められる²⁰⁾。これは人間が読書するという行為を通じてしか今のところ理解されないものである。ここでは場面や舞台のレベルで、景観の見え方や託された心象を切り口としてコノテーション(意味)を読み取り、多くの作品で共通するコノテーションを抽出する。これが文脈レベルの分析である。

3. 詞句レベルの分析

3.1 分析方法

(1) 自然景観要素の抽出法 詞句の単位で自然景観に関する表現(シニフィアン)は、例えば「樹」「樹木」「木」など場面ごとに異なる可能性がある。しかしそのデノテーション(明示的な意味)は同じである。そこで既往研究²⁾を参照して表-1に示す9項目の景観要素のカテゴリーを設定し、これに属するデノテーションがあればシニフィアンの違いに関わらずその景観要素の記述があったと判断する。

(2) 舞台の分類枠 テキスト内の舞台は、森や湖といった場所、また主人公の家のある場所とそこから遠い場所、といった様々な舞台が

考えられ、これらの捉え方は分析の視点によって異なってくる。ここで自然景観は舞台の説明のための大道具や小道具のようなものと考えられる。そのため、自然景観の記述の有無は都市や農村といった舞台の性質に影響を受けると考えられる。また、このような自然景観を定量的に比較し共通する面を取り出すためには、例えば「主人公(20代女性)の家と最寄り駅の間の街路」といった細かい舞台分類では他作品に共通する舞台と自然景観を見つけることは困難で、このような分類は不適切である。舞台分類はできるだけおおまかに、かつ自然景観の特徴の違いに対応した分類にする必要がある。以上を考慮して、ここでは通読後の印象をもとに表-2のように分類した^{注4)}。舞台は大きくまちといなかに分けられ、そのロケーションにより東京、地方、外国に分けられ、両者のマトリックスで6分類になる。東京は地名を明記され多くの作品で明らかに東京を舞台にした場面が見受けられ、他の町と比べて特別でありかつ多くのサンプルがある。一方地方の町はアノニマスで、同一都市ではないが東京に対する地方都市として一括した。外国は具体的な地名を伴って書かれることが多い。日本にはない場所として童話風挿話の舞台も含めて外国と考えた。このような舞台のカウントは、例えば東京のオフィス街を舞台とした物事の記述があれば「東京・都心」が1舞台とした。また会話のなかに一言出てくるだけの場所(例えば「息子が東京の大学に行っている」)も、登場人物が生活している場所も同じ1舞台でカウントした。次に、各作品における主な舞台となった場所を把握するため、登場人物の主な行動が展開する作品内の中心的な場所を主舞台と名付け、1作品から1主舞台を判断した。

全体の舞台数は161、主舞台数は55で平均すると一作品当たり約3舞台である。舞台数、主舞台数共に「地方・町」がそれぞれ34,13で最も多い。次いで「東京・都心」(31,10)が2番目の出現数である(表-2)。(3)年代区分 自然景観イメージの経年変化を把握する尺度としては、受賞年とその作品の舞台の推定年の2つが考えられる。ここでは個々の作品はその作品が書かれた時代を直接的、間接的に反映したものと考えられることから受賞年によって年代変化をみる。例えば過去への回帰が強い作品も、その時代の風潮の中でこそ書かれ評価されたと考えられる。このような受賞年で作品をみることで、作品が成立した時代を直接的、間接的に反映した景観が読み取られる。

受賞作品の内容と各期に含まれる作品数を考慮して受賞年を表-3のように3分割する。この区切り年は実際の高度経済成長の終わり(1972)やバブル経済の始まり(1985頃)等より数年ずつ遅れている。Ⅰ期の作品にはまだ戦争の記憶が強く、戦後の新体制と高度経済成長の中で戦中の思い出が端々に出てくる。Ⅱ期にあたる70年代末から80年代末までの期間は、経済的に安定して豊かさが当たり前となった風潮での作品群と考えられる。11年間をかけて18作品が受賞し小説的には不向きであった。続くⅢ期は、高度技術や情報化の進行していく社会への不安や、過去のものとなった親密な地域社会への

慕情や読み直しが随所にみられる作品群である。表-4に示すようにⅠ期に「地方・町」に最も多くの主舞台が持たれたが、東京、地方、外国に主舞台が散らばるⅡ期を経て、Ⅲ期から多くの舞台と主舞台が「東京・都心」に持たれている。作品当りの舞台数はⅠ期2.6Ⅱ期2.8Ⅲ期3.4と時代が下るに従って増加し、一つの物語の中の生活圏が多くの舞台にまたがるようになっている。

3.2 自然景観要素の出現傾向

(1) 自然景観要素の出現数と出現率 自然景観要素は舞台ごとで記述の有無をカウントし、舞台内にその記述があれば何回どのように表現されていたかにかかわらずその舞台における出現頻度を1とした。これは次の理由による。小説中の言葉は相対的な重みを持ち、また同じ表現を嫌い異なる言葉で言い換えられたり、陰險的に表現されるものもある。そのため、詞句が出現した毎に単純に頻度を数える作業も、その解釈も難しい。説明する言葉の長さに着目する方法もあるが^{注5)}、本テキストは同一作家による作品群でないので、作家による表現手法の違いから作品相互を単純に比較できないおそれがある。一方、小説中の表現から舞台に在る景観の表現の有無を判断することは客観的にできる。その結果は個々の作品における舞台の景観の構成を、またその累計としての作品群全体の結果は共通するか否かで重みづけられた景観の構成を表していると考えられる。

ここで全自然景観要素数を要素ごとに舞台数で割ったものを出現率と呼ぶ。表-5にみるように、平均すると一作品当たり7.3要素、一舞台当たり2.5の景観要素が書かれている。各要素の出現率は全体に湖沼以外はおよそ3割前後で、樹花>空>海>森林>川>山>田野>丘>湖沼という順である。主舞台数で割ると100%を超える出現率の樹花、空は主舞台でなくても書かれる景観要素である。

テキストの偏りについて考察するため、本研究で得られた自然景観要素の全舞台数に対する出現率を文献2)の校歌に現れた景観の出現率と比較する(図-1)と、より山、川が少なく、森林、樹花、空、湖沼が多い。校歌では地域景観の枠組みをうたいあげるとき、教育理念に沿ってそびえる山や流れる川が引かれると思われる。それに対して小説では、登場人物たちの生活感覚を説明するために自然景観が書かれている。ストーリーの展開上その景観はドラマチックで心象を投影しやすいものが選ばれていると思われる。しかしそれは読者にとって自然に感じられるような生の模倣として作られる必要があり、また作者もその景観を表現できる程度それに親しんでいる必要がある。そこで登場人物、作者、読者を含めた人々の生活感覚に身近な景観要素が多く書かれていると考えられる。このように小説群全体では地域景観の大きな枠組みとなるような山の比重は特化したものではなく、森林や樹花、空、湖沼がより身近で、それに沿って心象を展開しやすい景観となっている。

(2) 自然景観要素の出現率の年代変化 表-6は要素ごとの出現率を、表-7は要素の構成比を各期ごとにみたものである。まず舞台当りの

山	山とそれを含む複合語
海	海、湾、港、浜など
川	川、川原、川べりの土手
丘	丘と書かれているもの
田野	田畑、盆地、平野
湖沼	斜面畑含む
森林	池、湖、沼、泉、湿地
樹花	森あるいは林。面的広がりがある密集した樹木群
空	木や草花。並木を含む
	空と書かれているもの

1.東京・都心	東京の町なか	31(10)
2.東京・郊外	東京のはずれ	18(10)
3.地方・町	地方都市、町	34(13)
4.地方・農村	地方の農村、農地、集落	30(9)
5.外国・都市	外国の首都級都市	25(8)
6.外国・田舎	外国の地方の田舎町、農地	23(5)
合計		161(55)

Ⅰ期 1970-1976 (6年間19作品49舞台)	戦争の記憶が端々から出てくる
Ⅱ期 1977-1987 (11年間18作品50舞台)	豊かさがあたりまえという風潮
Ⅲ期 1988-1994 (8年間18作品62舞台)	高度な技術発展等への不安

	東京 都心	東京 郊外	地方 町	地方 農村	外国 都市	外国 田舎	舞台数/ 作品数
Ⅰ期	9(2)	7(4)	10(6)	12(2)	5(3)	6(2)	49(19)
Ⅱ期	7(2)	5(3)	12(4)	10(4)	9(4)	7(1)	50(18)
Ⅲ期	15(6)	6(3)	12(3)	8(3)	11(1)	10(2)	62(18)
合計	31(10)	18(10)	34(13)	30(9)	25(8)	23(5)	161(55)

景観要素数はⅠ期3.04Ⅱ期2.6Ⅲ期1.95と時代が下るにつれて減少傾向にある。次に各要素の出現率の変化をみると山、海、田野はⅠ期からⅢ期へと減っている。殊に田野と海のⅢ期における減少が急激である。各期における構成比(表-7)も徐々に減り、山、田野の占める割合はⅢ期に各々全体の1割を切る。一方構成比がⅡ期に減りⅢ期に増える景観要素として川、丘、湖沼、森林、樹花がある。出現率でみても丘はⅢ期に増えている。一方空はⅡ期で増えてⅢ期で減り、Ⅱ期に増える唯一の景観要素である。年代ごとにまとめると、舞台当たりの要素数は年代が下るに従って減少している。要素ごとには、Ⅰ期は樹花、森林、海、田野、空、川、山がそれぞれ1割以上シェアしている。Ⅱ期は山、海、川、田野の出現率かつ構成比が減少し、空に対してのみ関心が注がれている。Ⅲ期には丘が増加傾向にあるが山、海、田野の減少は依然として続いている。

(4) 舞台タイプと要素出現の関連 表-8は舞台タイプごとに自然景観要素の記述の有無をみたものである。「東京・都心」「地方・町」「外国・都市」といったまちで自然景観が全くない舞台が多い。一方、「東京・郊外」を舞台としたものは全て自然景観を伴っている。自然景観の記述のない舞台はⅢ期に増加していて、特にまちでそれが著しい。1舞台当たりの要素数を舞台タイプ別にみると、「地方・農村」「東京・郊外」で共に平均3.5の自然景観要素の記述がある。「東京・都心」は0.87と小さい。その変化をみると、「地方・町」「外国・都市」で減少が大きい。「東京・郊外」「外国・田舎」ではⅢ期において最も要素数が多く、意識的に自然景観を求めているように思われる。次に表-9は年代、舞台ごとに自然景観要素の出現数を示したものである。これをみるとⅠ期からⅢ期にかけて減少する山、川、田野は主に「地方・町」の、海は「地方・農村」のものであり、Ⅱ期で増加する空は「地方・農村」「外国・都市」の、Ⅲ期で増加する丘、森林、樹花は「東京・郊外」「外国・田舎」のものである。地方が都市化し、東京郊外や外国の田舎の自然が見直されていると考えられる。また一般に「東京・都心」「地方・町」「外国・都市」等のまちで樹花や空が他の要素と比べ出現数が多く、まちで身近な要素と考えられる。

(5) まとめ 特に出現の割合が低い湖沼以外、各自然景観要素の出現率はほぼ3割前後で、突出した景観要素はみられない。時代が下るにつれて自然景観の全体の出現数は減少する。その内容をみると山、川、海、田野が「地方・町」「地方・農村」で一方向的に減少し、丘、森林、樹花がⅢ期に「東京・郊外」「外国・田舎」で増加に転じる。このように一部の地域で一部の景観要素について回復がみられるが

それ以上に地方の都市化が激しいと考えられる。舞台タイプごとにみると、まちで自然景観がない舞台が多く特にⅢ期に増えている。

このように、年代と舞台タイプによって自然景観要素の出現の傾向に違いがみられた。次に各要素の具体的な書かれ方や付された意味を各作品の文脈の中で、年代、舞台と関連させてより詳しくみる。

4. 自然景観の意味とその変遷

4.1 分析の手順

文脈レベルの分析のために、自然景観の具体的な表現とその意味内容をまとめたデータベースを作成した。その作業手順を以下に述べ、具体例を図-2に示す。

まず、一つの景観要素の表現は幾つもの異なる意味内容を持つことがある。このような場合には意味内容を列記した。一方舞台の説明として景観が提示されているだけで景観に託された意味内容が読み取れない場合は、意味の出現は0とした。意味内容は、視点場や視対象、景観の構成といった景観の見え方の条件等と、景観に付随する心象から捉えた。作品の読後感からこのような意味内容を思いつくかぎりあげ、これをKJ法によって似た内容のものをできるだけまとめ、見出しをつけて整理した。このようにして得られた意味内容のキーワードを図-3に示す。このキーワードがついたデータベースを自然景観のカテゴリー、舞台タイプ、年代ごとに検索して、共通するキーワードをみることで、多くの共感に裏付けられた普遍性の高い心象が得られると考えられる。自然景観要素ごとのキーワード集計結果を表-10に示す。ここから自然景観要素の代表的な意味内容が読み取られる。また、意味内容の出現数が要素出現数より多い、山、海、川、丘、湖沼、森林といった要素は意味内容が濃く、多くの心象を伴った象徴的な景観要素と考えられる。一方田野、樹花、空といった要素は意味がはっきりしないにも関わらず作品内に書かれていることから、生活感の演出のために必要な要素と考えられる。次に舞台タイプと年代ごとにみた自然景観要素の意味内容を表-11に示す。ここから、どんな舞台でどのような意味内容を持って書かれているか、また年代によってそれがどう変化しているか読み取ることができる。このような作業を経て、自然景観要素ごとに、視点場、視対象、景観の構成、景観に付随する意味を考察した。要素ごとにまず全体の特徴を述べ、その年代による変化、舞台タイプごとに特徴的な共通部分に着目し考察する。

4.2 要素ごとに託された意味

(1) 山 視点場としては平地、山中の両方があり、具体的な視対象と

表-5 自然景観要素ごとの出現数と出現率

	山	海	川	丘	田野	湖沼	森林	樹花	空	合計
出現数	43	50	46	30	42	16	48	66	59	400
出現率(1)	26.7	31.1	28.6	18.6	26.1	9.9	29.8	41.0	36.7	25
出現率(2)	78.2	90.9	83.6	54.5	76.4	29.1	87.3	120.0	107.3	7.3
(1)舞台数で割った出現率(%)	(2)主舞台数で割った出現率(%)									

表-6 自然景観要素の出現率(%)の年代変化

	山	海	川	丘	田野	湖沼	森林	樹花	空	要素数
Ⅰ期	34.7	38.8	36.8	20.4	36.7	12.2	38.8	49.0	36.7	3.04
Ⅱ期	28.0	28.0	28.0	14.0	28.0	10.0	26.0	40.0	50.0	2.60
Ⅲ期	19.4	21.0	22.6	21.0	16.1	8.1	25.8	35.5	25.8	1.95

表-7 自然景観要素の構成比(%)の年代変化

	山	海	川	丘	田野	湖沼	森林	樹花	空	合計
Ⅰ期	11.4	12.8	12.1	6.7	12.1	4.0	12.8	16.1	12.1	100.0
Ⅱ期	10.8	13.8	10.8	5.4	10.8	3.8	10.0	15.4	19.2	100.0
Ⅲ期	9.9	10.7	11.6	10.7	8.3	4.1	13.2	18.2	19.2	100.0

表-8 舞台タイプごとにみた自然景観要素全体の出現状況

	東京	東京	地方	地方	外国	外国	合計
	都心	郊外	町	農村	都市	田舎	
自然景観要素の出現しない舞台数							
Ⅰ期	4	0	2	3	1	0	10
Ⅱ期	4	0	5	1	0	0	10
Ⅲ期	9	0	6	0	9	1	25
舞台当たりの自然景観要素数							
Ⅰ期	0.89	3.1	4.6	2.9	3.6	3.3	
Ⅱ期	1.1	2.8	2.0	4.5	2.6	2.3	
Ⅲ期	0.73	4.5	1.4	3.3	0.55	3.4	
平均	0.87	3.5	2.6	3.5	1.9	3.0	

表-9 舞台タイプ、期ごとの自然景観要素の出現数

	山	海	川	丘	田野	湖沼	森林	樹花	空	合計
東京Ⅰ	0	1	1	0	0	1	2	1	2	8
東京Ⅱ	0	1	0	0	0	1	2	2	3	8
東京Ⅲ	1	2	0	1	0	0	1	3	3	11
合計	1	4	1	1	0	1	5	6	8	27
東京Ⅰ	1	4	3	0	3	0	2	5	4	22
東京Ⅱ	2	1	1	2	1	1	1	3	2	14
東京Ⅲ	1	3	2	4	3	1	4	5	4	27
合計	4	8	6	6	7	2	7	13	10	63
地方Ⅰ	6	6	5	5	6	1	4	7	6	46
地方Ⅱ	3	3	4	1	3	0	2	3	5	24
地方Ⅲ	0	4	1	1	0	1	2	4	4	17
合計	9	13	10	7	9	2	8	14	15	87
地方Ⅰ	6	4	5	1	4	2	5	6	2	35
地方Ⅱ	6	6	4	0	7	2	5	7	8	45
地方Ⅲ	5	6	5	2	3	1	3	5	2	26
合計	17	10	14	3	14	5	13	18	12	106
外国Ⅰ	2	1	1	2	1	2	3	3	3	18
外国Ⅱ	2	4	3	3	0	1	1	3	6	23
外国Ⅲ	1	0	1	0	0	0	2	1	1	6
合計	5	5	4	5	1	3	6	7	10	47
外国Ⅰ	2	3	3	2	4	0	3	2	1	20
外国Ⅱ	1	3	2	1	3	1	2	2	1	16
外国Ⅲ	4	4	5	5	4	2	4	4	2	34
合計	7	10	10	8	11	3	9	8	4	70

いのものが幾つかあった。視対象は川面の輝きやごみ、流れ、川べりの土手、草などである。景観の構成としては、川べりに留まって見る風景、川に沿った移動や橋を渡る移動に伴うシークエンス景観が多くみられる。川べりでは主人公たちの休息、遊び、会話、出会いなどの行為が展開する。遊びの内容は釣り、泳ぎ、花見、土手斜面で遊ぶなどである。このように川べりは遊びの場所であるが、一方で主人公の友人が溺れたり遊びが禁止されている危険な場所でもある。また、川沿いは道であることが多くその方向への移動がみられるが、川に直行すると移動が妨害されて川は境界となる。このように川は遊びと危険、移動とその妨害といった二面性を帯びた景観要素と考えられる。年代変化をみると、Ⅲ期になると釣り、萱刈り、土手での遊びが、幼年期や少年期の思い出として回想されるなど間接的な川の表現が多い。舞台タイプごとにみると、川の出現数の最も多い「地方・農村」では、Ⅱ期まで川べりの遊びの描写が少なく、渓谷を橋や川沿いの道から見下ろすといった移動中の描写が多い。激しい水流、吊り橋、大きな石の河原などが視対象となっている。Ⅲ期にはヤマメ釣などの遊びが開発や汚染が進んでできなくなったものとして、失って始めてその重要性がわかったかのように書かれている。「地方・町」では、Ⅰ期から既に汚染された水やごみ、ダムで水量の少ない川など汚い川の景観が書かれ、その後出現数が次第に減る。一方「外国・田舎」ではⅢ期に出現数が増え、会話中に釣り等が出てくるものが多い。日本にはなくなった美しい川の景観やそこでの遊びを外国の田舎に求めているように思われる。このように、川は移動とその妨害、遊びと危険といった二面性のある意味を持ち、川べりは遊びや休息等が展開する場所である。しかしバブル期には直接の遊びの体験が減り、遊びの思い出が残っている。

(4) 丘 視点場は平地や丘斜面、頂上などで、視対象は、傾斜、稜線、斜面の植物などであった。丘の上からの眺望の描写も多い。立地としては町中や外れにある独立した高みが多い。山のように遠くはな

く、学校裏などから手軽に登ることができ、丘頂上に公園やベンチといった休憩設備、また日常生活からは離れた施設（火葬場、検疫所）があるものもある。景観の構成と意味としては、丘の上から町を眺め自分や人の存在を客観的に町の大きさの中で相対化して感じるといった表現が多くみられる。主人公は心理的にいきづまった状態で丘にのぼり、町を見渡してそれまでの自分の悩みを小さく感じる。また山と似て境界としての意味や移動中に見えるものでもある。年代変化をみると、Ⅲ期に宅地化等の開発が多く書かれ、それと連動するように丘の上からの眺望や境界としての表現がなくなる。変わって丘陵地の上り下りといった移動中の傾斜の描写が増える。丘が宅地開発されて町を見下ろす視点場がなくなり傾斜のみが残っていると考えられる。舞台タイプでは、「地方・町」を舞台とした丘がⅠ期に最も多かったのが、その後急減する。この頃宅地開発が進み、町を見下ろす丘の描写がなくなったと考えられる。Ⅲ期には「東京・郊外」「外国・田舎」で出現数が増え、丘の全体の出現数のピークとなる。「東京・郊外」では整地された丘陵地、丘斜面の団地や別荘地、起伏のある道、「外国・田舎」では思い出の中の道といった書かれ方をされている。このように生活の場所となった丘の表現が増える。全体として、高度経済成長期までは「地方・町」における丘の上からの眺望が多く書かれ、思い出のときに手軽に登れる自分を見つめ直す場所になっていた。しかし高度経済成長後は宅地開発に伴いそのような視点場が失われている。バブル期には「東京・郊外」を舞台とした宅地化された丘の団地や道の起伏が描写され、生活の場所に残された傾斜から開発前の自然が忍ばれている。

(5) 田野 視点場は道路や鉄道で、徒歩や車、電車の窓から移動中に見られる景観の描写が多い。また山、丘の上を視点場として見渡されるものもある。視対象は田畑や野原の広がりやそれを覆う植物などである。景観の構成と意味としては、道路沿いのシークエンスや山等から見渡される田畑などが、心象を伴わずに舞台の単なる説明

表-11 年代、舞台ごとの自然景観要素の意味内容

	東京・都心	東京・郊外	地方・町	地方・農村	外国・都市	外国・田舎
山						
Ⅰ		移動中に平地から見えるⅠ	境界5 (町境2墓2被差別部落Ⅰ) 眺望2	境界3 (隠れ里1病室窓からⅠ巡礼地Ⅰ) 他	歴史2思い出2眺望Ⅰ (市街を取り巻くⅡ2)	移動Ⅰ (戦時中Ⅰ) 境界Ⅰ (火葬場Ⅰ)
Ⅱ		境界Ⅰ 思い出系Ⅰ (父の墓) Ⅰ-Ⅰ	眺望Ⅰ相対化Ⅰ境界Ⅰ移動Ⅰ	境界8 (家を囲むⅣ、規律Ⅰ、移動2、墓Ⅰ)	境界Ⅰ (山を越えたところにある戦争Ⅰ)-Ⅰ	話Ⅰ (川の主流の山Ⅰ)-Ⅰ
Ⅲ	相対化Ⅰ、話Ⅰ	移動中Ⅳに見えるⅠ	思い出Ⅰ	話2悲劇Ⅰ-3 (採石場2、峠の渋滞道路Ⅰ)	思い出Ⅰ移動Ⅰ (町から見える岩山Ⅰ)	写真2 (尾根Ⅰ) 移動Ⅰ思い出Ⅰ
海						
Ⅰ	思い出系Ⅰ (渡り鳥の形)	遊び3 (砂2波2松林Ⅰ水平線Ⅰ波音Ⅰ)-Ⅰ	相対化Ⅲ移動2 (潮匂いⅢ風3波音Ⅲ波3)-Ⅰ	危険2話Ⅰ思い出Ⅰ (浜辺海草Ⅰ思い出Ⅰ)	労働Ⅰ (埠頭で荷物運びⅠ)	移動Ⅲ労働Ⅰ (日没2渡ってきた海2)
Ⅱ	移動Ⅰ遊びⅠ (悲しいことがあった後海へ)	思い出Ⅰ (駅ホームで江ノ島に遊びⅠ)	遊び7 (人で行く4波2風2波音Ⅰ波Ⅰ)	思い出Ⅱ遊び2 (波音Ⅲ波2浜2)-Ⅰ	歴史Ⅰ移動Ⅰ-2	思い出Ⅲ (渡ってきた海Ⅰ)-Ⅰ
Ⅲ	人と会う場所Ⅰ (港) 思い出Ⅰ (工場)	遊び4相対化Ⅱ (港2海面2砂Ⅰ松林Ⅰ)	4			話3思い出2写真Ⅰ (夜の海2戦争2)
川						
Ⅰ	休息Ⅰ (船Ⅰ)	移動2 (電車2) 遊びⅠ危険Ⅰ (線路きわⅠ)	境界2汚染2 (ごみⅠ) 遊び2危険Ⅰ (増水Ⅰ)	移動4 (流れ3谷3橋2河原Ⅰ)-Ⅰ	歴史Ⅰ (市の端を流れる川Ⅰ)	移動2遊びⅠ (泳ぐⅠ)
Ⅱ		思い出Ⅰ (川上空セスナ機)	移動4休息Ⅱ (橋4) 汚染2 遊びⅠ危険Ⅰ	移動4 (流れ2川沿い道2橋2) 危険Ⅰ	思い出Ⅱ (橋2)-Ⅰ	危険Ⅰ (溺れるⅠ) 遊びⅠ (泳ぐⅠ)
Ⅲ		遊びⅠ (桜Ⅰ) 歴史Ⅰ (川中心に発展Ⅰ)	思い出Ⅰ汚染Ⅰ (運河で釣った臭い魚)	遊び4移動Ⅲ人と会うⅠ思い出Ⅰ話Ⅰ	移動Ⅰ (橋Ⅰ)	話2写真Ⅰ遊びⅠ思い出系Ⅰ 思い出Ⅰ
丘						
Ⅰ		相対化Ⅰ眺望Ⅰ遊びⅠ	相対化Ⅴ眺望Ⅲ (町3)	移動Ⅰ (丘に遮られる)	休息Ⅰ眺望Ⅰ-Ⅰ	境界2
Ⅱ		相対化Ⅰ眺望Ⅰ話Ⅰ	相対化Ⅰ眺望Ⅰ話Ⅰ		移動Ⅰ思い出Ⅰ話Ⅰ	境界Ⅰ
Ⅲ	-Ⅰ	開発3移動Ⅲ	開発Ⅰ (キャンパスⅠ)	開発2移動Ⅰ		移動2思い出Ⅰ話Ⅰ他2
田野						
Ⅰ		移動2やすらぎⅠ	移動3出会いⅠ遊びⅠ-2	移動4 (徒歩3)	生命力Ⅰ	移動2思い出Ⅰ話Ⅰ-Ⅰ
Ⅱ		-Ⅰ	移動2境界Ⅰ-Ⅰ	移動2境界Ⅰ出会いⅠ		思い出Ⅱ話Ⅰ悲劇Ⅰ
Ⅲ		移動2歴史Ⅰ		労働2-Ⅰ		写真Ⅰ相対化Ⅱ悲劇2
湖沼						
Ⅰ	休息Ⅰ (ベンチⅠ)		話Ⅰ	話Ⅰ出会いⅠ悲劇Ⅰ	歴史Ⅰ悲劇Ⅰ休息Ⅰ他Ⅰ	
Ⅱ		-Ⅰ		話Ⅰ (舟Ⅰ)-Ⅰ	休息Ⅰ (公園Ⅰ)	遊びⅠ (公園ボートⅠ)-Ⅰ
Ⅲ		開発Ⅰ (高校庭Ⅰ)	休息Ⅰ (キャンパスⅠ)	投影Ⅰ (庭Ⅰ)		話2遊び2
森林						
Ⅰ	やすらぎⅠ遊びⅠ	移動2やすらぎⅠ	移動Ⅰ-3	移動4生命力Ⅱ (山2)	歴史2悲劇Ⅰ (林2)	-3
Ⅱ	やすらぎⅠ移動Ⅰ	開発Ⅰ	歴史2	移動Ⅰ労働Ⅰ投影Ⅰ-2	悲劇Ⅰ遊びⅠ (公園Ⅰ)	遊びⅠ話Ⅰ
Ⅲ	投影Ⅰ (家の窓から駒沢公園の森Ⅰ)	移動3 (雑木林2海岸松林Ⅰ)	思い出Ⅲ3やすらぎⅠ移動Ⅰ (雑木林Ⅰ)	開発3 (山2商品Ⅱ2) 生命力Ⅰ	話Ⅰ移動Ⅰ (山斜面の樹木Ⅰ)	移動ⅢやすらぎⅠ思い出Ⅰ写真Ⅰ
樹花						
Ⅰ	やすらぎⅠ (公園Ⅰ)	生命力Ⅱ遊びⅠ	遊び2投影Ⅰ生命力Ⅰ	場所名2生命力Ⅰ他2	思い出Ⅰ-2	生命力Ⅰ-Ⅰ
Ⅱ	やすらぎⅡ (庭2)	-3	会う2生命力Ⅰ思い出Ⅰ	やすらぎ2他4-3	思い出Ⅰ-2	投影2
Ⅲ	やすらぎⅠ自分投影Ⅰ	遊びⅠ投影Ⅰ	思い出Ⅲ3やすらぎⅡ	思い出Ⅱ話Ⅰ-2	-Ⅰ	投影Ⅰ話Ⅱ写真Ⅰ
空						
Ⅰ	思い出系Ⅰ-2	相対化Ⅰ-3	投影3相対化Ⅰ	投影Ⅰ-Ⅰ	思い出系ⅠⅠ-2	相対化Ⅰ思い出Ⅰ
Ⅱ	自分投影Ⅰ (雲Ⅰ)-2	相対化Ⅰ投影Ⅰ	相対化Ⅲ投影Ⅱ	投影3-5	投影2相対化Ⅰ	-Ⅰ
Ⅲ	相対化Ⅰ (雲Ⅰ)-2	相対化Ⅰ投影Ⅰ写真Ⅰ	相対化Ⅲ-Ⅰ	相対化Ⅰ-Ⅰ	相対化Ⅰ	-2

数字は意味の出現数 () 内は具体的な表現内容例 記号「-」は意味の出現なし 空欄は要素出現なし

として記述されていることが多い。年代変化をみると、Ⅰ期に多かった移動中の描写がその後急減する。開発等が進み、移動の際に周囲にあった田畑の景観がなくなったと考えられる。舞台タイプでは、田野の出現は「地方・町」で徐々に減り、Ⅲ期に0になる。「地方・農村」でもⅡ期に出現数が減り、同時に田畑の宅地化のようすが描かれる。「東京・郊外」ではアパートなどと混在している緑地が移動中や丘の上から眺められている。一方、「外国・田舎」に出現する田野は、大陸の広大な原や田畑、砂漠等であり、思い出やそれまでの日常生活を破壊するような悲劇の場所といったドラマチックな舞台として書かれていた。このように、全体として田野の景観は主に「地方・町」「地方・農村」を舞台として移動中に周囲に当たり前のよう存在するものであった。しかし高度経済成長後減少している。

(6) 湖沼 視点場は水のほとりで、視対象は湖水面や樹木、空、雲等の反射、見通せない場合も含め水底のようすなどが書かれている。景観の構成としては水面への写り込みも併せて湖沼周辺の環境が描写されることが多い。景観に託された意味は大きく二つに分かれる。一つは休息や遊びといった行為が展開する明るいイメージの公園の池や湖で、健康的な遊びの場所である。もう一つは悲劇の場所となったり、思い出や歴史を伴う樹木に囲まれた寺や庭園の暗い池のイメージである。年代変化は、出現数が少なく意味のカテゴリーが多いので読み取ることが難しい。年代を通じて多様な意味を持ちえる景観と考えられる。舞台タイプごとにみると、「地方・農村」では木に囲まれた濁った池や沼が寺境内や庭にあり、出会いや悲劇の場所となる表現が多い。一方「東京・都心」「地方・町」「外国・都市」「外国・田舎」では、公園の池でボートや釣りで遊び、ベンチで休息するといった表現が多くみられる。このように湖沼には、まちや外国に多い遊ぶ公園の池と、「地方・農村」に多い劇的な出来事の舞台となる木に囲まれた寺等の池がある。年代変化は特にみられない。

(7) 森林 視点場は平地や山の道や庭先、家の窓であり、なかでも道を視点場として移動中に見られるものが多い。視対象は山斜面の森、浜の防風林、公園の森、屋敷森などの樹冠、葉、木の葉擦れの音などである。景観の構成としては、道や家の窓から山斜面の森林が仰ぎ見られるものが多く、他に山等から見下ろされる林、道の両脇の林、家の中で聞く森の葉擦れの音などがあつた。景観の意味としては、移動中に自然に目に入ってくるものとして書かれている他、窓等から主人公が眺めて生命力ややすらぎを感じ物思いにふけるといった表現が多い。また山斜面の森は、山の不動感や歴史性を背景として、不変のもの、四季のめぐりと共に繰り返し可能な、人間を超えた生命力を感じさせるといった意味を託されていた。一方公園の森は、都市の中で密な樹冠に囲まれたやすらげる空間としての意味を持っている。年代変化をみると、山斜面の森が徐々に出現数が減っている。Ⅲ期にはそれに変わって思い出としての雑木林が書かれることが多い。Ⅲ期に森林の出現の構成比が増加していて相対的に重要度が高まっている。舞台タイプでは、「東京・都心」「東京・郊外」で神社の森、公園の森、雑木林が書かれている。「東京・郊外」でⅢ期に増える雑木林は、郊外の団地に引っ越してきてすぐの周囲の林のようすが多い。「地方・町」「地方・農村」では町の背後や周囲の山斜面の森が多く書かれている。「地方・農村」でⅢ期に、屋敷森を切り倒した思い出や、木立に包まれた土地や水が別荘等に商品化されるといった表現がある。「地方・町」はⅡ期に、「地方・農村」はⅢ

期に森林の出現数が減る。このように、全体として山斜面や公園の森が生命力ややすらぎを感じさせる景観として書かれている。高度経済成長後の「地方・町」「地方・農村」での出現数の減少に伴って山斜面の森が減り、「東京・郊外」の雑木林の思い出等の記述が多くなっている。しかしそれまでの意味が失われているわけではなく、相対的に重要度が増していると考えられる。

(8) 樹花 視点場は窓や縁側など家の中や周囲、木の下などである。視対象は庭の木、花、草などと、並木や公園の木、校庭や病院などの施設の木などである。景観の構成としては、木の下や家の中で感じる葉ごしの光や葉擦れの音の描写が多い。また木の下は休息の場所、人と会う場所、場所名を指定する時の目印としても書かれている。景観の意味をみると、樹花は主人公の身近にあって、日常生活の中や物思いに耽っている時などに主人公の視線を受けることが多い。その時主人公の気持ちなどが樹花に投影されたり、樹花を見た主人公に安らぎをもたらしたり、生命力を感じさせたりする。樹花を通して主人公の心理描写が発展することが多い。年代変化をみると、自分を映すものや話としての樹花は年代が下るにつれて増加する。場所名を示すもの、思い出、生命力を感じさせるものとしての表現は減少する。全体の出現数に変動はないが、他の景観要素が減少しているので、身近な自然景観として相対的に重要度が増していると考えられる。舞台タイプごとにみると「東京・都心」では公園や並木、「東京・郊外」では学校や並木、「地方・町」では庭の樹花が表現されている。「地方・農村」では場所名の指定に樹木の名が使われることがある。このように全体として樹花は身近で自分を投影したり、休息や安らぎをもたらすものである。年代を通して出現数はあまり変化しないが、相対的に重要度が増していると考えられる。

(9) 空 視点場と景観の構成は舞台により異なる。視対象は、夜（星月）、夕（雲、夕焼け）、青空、曇り空がある。空もまた樹花と同じく身近にあり、自分を投影したり、自分を見つめ直すきっかけになるものである。特に、雲に自分の感情を投影して同化し、青空や夜空（星月の天体がある）により自分の大きさを見つめ直している。年代変化をみると、自分を映すものとしての空はⅡ期に出現のピークがある。他の景観要素がⅡ期に出現数が減るため、空の重要度が増したと思われる。一方自分を相対化するものとしての空は年代が下るに従って増加している。これも、山や丘といった自分を相対化する他の景観要素の減少と連動していると思われる。舞台タイプごとにみると「東京・都心」ではビル屋上や地下鉄出口から、「東京・郊外」「地方・町」「外国・田舎」では家の庭からや海上の空が眺められている。「地方・農村」では山の端と共に見られることが多い。このように全体として空は身近にあり、高度経済成長後に自分を投影する雲、バブル期に自分を相対化する夜空や青空が多く表現されている。他の自然景観要素が減少しているため、残された身近な自然景観である空に相対的に多くの心象が託されるようになっている。

4.3 まとめ

全体の傾向として、出現数でみると、1980年代から「地方・町」で、1990年頃から「地方・農村」で山、海、川、丘、田野、森林といった要素の出現数が減っている。託された意味についてみると、山、海、川、丘、森林、湖沼といった要素は多くの心象を伴った象徴的な景観要素と考えられる。このような山、海、川、丘は高度経済成長後にそれまで持っていた意味を失っている。一方田野、樹花、

空といった要素は、あまり心象を託されていない。しかしこの中で樹花と空は、年代が下るにつれて自分を投影したり見つめ直したりするものといった意味を相対的に多く託されるようになっていく。

景観要素ごとにみると、まず山、海、川は年代が下るにつれてそれまで託されていた意味を失い、かつ出現数が減っている。山は、高度経済成長期まで生活圏の境界として書かれることが多かった。しかし、出現率の減少と連動するように、高度経済成長後、その存在感や意味が薄れている。海は、遊びの空間として書かれていた。「地方・町」「地方・農村」で経済開発が進んで海へ遊びに行くことが少なくなり、同時に匂いや音を伴ったなまなましい海から、視覚で眺められるだけの海の表現へ変化がみられる。川は、移動とその妨害、遊びと危険といった二面性のある意味を持ち、川べりは遊びや休息等が展開する場所である。しかしバブル期以降には直接の遊びの体験が少なくなり、遊びの思い出が残っている。

次に、丘は、全体の出現数は減少していないが、託された意味が変化している。高度経済成長期までは「地方・町」における丘の上からの眺望が多く、自分を見つめ直す場所になっていた。しかし経済成長後、宅地開発に伴いそのような視点場が失われている。一方バブル期に「東京・郊外」を舞台とした丘の団地や道の起伏の描写が増え、生活の場所に残された傾斜が丘の表現となっている。

また、田野の景観は主に「地方・町」「地方・農村」で移動中に周囲に自然にあるものであった。しかし経済成長後なくなっている。

一方、このような自然景観要素の減少に伴い、相対的に重要度が増している要素として森林、樹花、空がある。森林は山斜面や公園の森が生命力や安らぎを感じさせる景観として書かれ、経済成長後の「地方・町」「地方・農村」では山斜面の森が減り「東京・郊外」等で雑木林の思い出等の記述が多くなっている。全体としてバブル期に構成比と意味の出現数が増えている。樹花は身近で自分を投影したり、休息や安らぎをもたらしものである。年代を通して出現数があまり変化せず、相対的に重要度が増していると考えられる。空も身近で、経済成長後に自分を投影する雲、バブル期に自分を相対化する夜空や青空が多く表現されている。また湖沼は出現数が少ないが、年代を通じ遊びや劇的な出来事に関わる多様な意味を持ちえる。

5. おわりに

現実をモデル的に表現していて、具体的な表現が普遍性を帯びていると考えられる1970～94年の芥川賞受賞作品群をテキストとして、近年の自然景観イメージの解明を試みた。ここではテキストにみられる自然景観の共通した部分が、日本の近年の自然景観イメージに関する一般的な意味を表していると仮定している。具体的には自然景観を山、海、川、丘、田野、湖沼、森林、樹花、空のカテゴリーに分け、その出現傾向及び視点場、視対象、景観の構成、託された意味内容を明らかにした。得られた特徴を要約すると、地域の枠組みとなるような山、海、川、丘、田野は出現数あるいは意味が減少、変化している。一方、空、樹花、森林は身近な景観であり、高度経済成長期以後は残された景観として相対的に多くの心象が託される傾向が強まっている。この結果から次のことが言える。

- 1) 思いを託す対象としての自然景観の種類が変化していること
- 2) 変化の全体的な傾向として、地域の枠組みとなるような景観が要素出現数としてもまた意味出現数としても減少し、都市で身近な景観要素に相対的に多くの意味が託されるようになっていくこと。

従って自然景観の多様性が具体的な形でまた意味レベルでも失われつつあると考えられること

- 3) バブル期にそれまでの自然景観の減少への反動のように一部の自然景観要素の出現数が増加に転じる動きをみると、生活の中で自然景観の必要性が感じられること

本論文で分析されたこのような自然景観の変化は、以下のような実際の自然景観の変化や自然に対する人々の意識の変化と呼応していると思われる。

- 1) 地域の自然景観が実際に開発によって失われたこと
- 2) ライフスタイルなどの変化のために生活空間から遠い場所（作家にとって実感できない場所）が生まれていること

こうした分析結果を事実として認識することは、景観計画・設計の方向性の議論や合意形成の場において重要であり、本論文はその基礎知識の一部を提供したと考えている。

今後の課題として、自然景観は小説のなかに書き込まれた様々な空間や景観の一部であり、テキスト内には都市や建築に関わる多くのデータがまだ眠っている。今後は別の視点から同テキストの分析を試みる予定である。

【注】

- 1) 樋口忠彦は「景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間」（技報堂出版、1975）のなかで、日本における「山や川や森、あるいは海というランドスケープ」(p.5)の重要性を指摘している。本研究はここでの「ランドスケープ」を「自然景観」という言葉で考える。
- 2) 本研究では日本の現代の自然景観に関する一般的なイメージを求めめるため、普遍性のあるテキストを選択する。このようなテキスト選択により結果の普遍性が保証されると考える。
- 3) 小説の著者の年齢、出身地、居住地などは個々の作品の内容に影響していると考えられるが、小説のモデル形成機能による普遍性の獲得、また共通して書かれた部分を扱うことにより、著者の属性にのみ左右される部分が排せられると考えるので、ここではそれらについて考察していない。
- 4) 船上や車中といった移動中の景観も、その場所により「外国・田舎」等のそれぞれの舞台に含めた。分類枠以外のものは存在しなかった。

【参考文献】 論—建築学会計画系論文集、都論—都市計画学会学術研究論文集

- 1) 萩島哲他4名: 19世紀ヨーロッパ風景絵画にみる都市景観に関する研究、論、No.413, pp.83-93, 1990/坂井猛他4名: 浮世絵風景画の視点場と遠景に描かれた山の仰角に関する分析、都論、No.28, pp.505-510, 1993/坂井猛他4名: 広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究、論、No.461, pp.165-174, 1994/船心治他4名: 広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察、論、No.482, pp.155-163, 19964
- 2) 矢部恒彦他2名: 小学校校歌に謳われた全国各地域景観イメージに関する研究、論、No.472, pp.111-122, 19956
- 3) 毛利隆子、後藤春彦: 歌にあらわれる『海』のイメージの変容—日本人の海の原因風景に関する基礎的研究、都論、No.29, pp.595-600, 1994
- 4) 千葉一輝: 江戸・東京における眺望の変容に関する研究、論、No.481, pp.157-166, 19963
- 5) Yu.M. ロトマン: 文学理論と構造主義、須草書房、1978, pp.32-44
- 6) ロラン・バルト: 物語の構造分析、みすず書房、1979, pp.1-2
- 7) ロラン・バルト: 零度のエクリチュール、みすず書房 1971, pp.30-40
- 8) 大江健三郎: 新しい文学のために、岩波新書、1988, pp.2-11, 76
- 9) 文庫8, pp.192
- 10) 文庫5, pp.23-24
- 11) 文庫8, pp.82-87
- 12) 文庫8, pp.100-101
- 13) 文庫8, pp.64
- 14) 彦楽他: 芥川賞90人のレトリック、潮文社、1992
- 15) 香西克彦: 芭蕉の風景—『玄住庵記』にみる風景の構造、論、No.455, pp.167-176, 19941/同: 芭蕉の風景—『洒落堂記』にみる風景の構造、論、No.467, pp.189-198, 19951
- 16) 黒岩俊介、前川道郎: 教会堂の現象学—マルセル・ブルーストの「失われた時を求めて」に於けるコンプレとその教会堂、論、No.391, pp.131-142, 1989/マルタンヴィルの鐘塔—ブルーストの『失われた時を求めて』に見る建築的出来事、論、No.406, pp.153-159, 198912/鐘塔体験—ブルーストの『失われた時を求めて』に見る建築体験の諸相、論、No.409, pp.133-142, 19903/建築経験の諸相—ブルーストの『失われた時を求めて』におけるサンティレール教会堂の鐘塔の場合、論、No.417, pp.99-107, 199011
- 17) 藤原学: 小説『細雪』にみられる建築的事象について、建築学会論文集、No.478, pp.189-197, 199512
- 18) 若山遊: 『源氏物語』における建築空間、論、No.408, pp.93-99, 19902/若山遊他2名: 夏目漱石の作品の中の建築の研究—舞台空間の推移からみた作品の類型について、論、No.476, pp.101-109, 199510/同: 夏目漱石の前期の長編小説の舞台となる建築空間の「意味」、論、No.478, pp.131-139, 199512
- 19) 池田朋子、相澤昭: 文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究—小説『城のある町にて』をケーススタディとして、論、No.450, pp.121-130, 19938/池田朋子、大貝彰: 文学作品中の空間描写にみる都市景観に関する研究—高山のケーススタディ、都論、No.28, pp.583-588, 1993/同: 高山の地方都市文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究—文庫8の分析を通じて、都論、No.29, pp.601-606, 1994
- 20) 前田愛: 都市空間のなかの文学、ちくま書房 1982, pp.5-20

(1996年7月10日原稿受理、1996年11月27日採用決定)